

序

肩関節痛や頸部痛のリハビリテーションとなると、「何をしたらよいのかわからない」、「難しい」、などという声を初学者の方からよく聞くことがあります。それはしかたのないことだと思います。なぜなら、学校で教わることはほぼなく、臨床実習においても症例を担当することも少ないからです。

肩関節は歴史的に研究対象となることが脊椎・股関節・膝関節などと比べると少なく、学問的には十分に成熟しているとはいえません。しかしながら近年では、肩関節の研究論文が劇的に増加し、肩関節を専門として診療を行う医療者も大幅に増えてきています。これは肩関節疾患に対して適切に介入すれば高い治療効果が得られることが理由の1つとして考えられます。また、肩関節の症状が構造異常のみならず機能異常によって引き起こされていることが多いことから、運動療法を主体としたリハビリテーションの効果が国内外で認められており、その需要は高まっています。

それに対して頸部は重要な脈管・神経系が走行していることもあり、古くから注目度が高く、多く研究され続けている部位です。リハビリテーションの対象としては頸髄損傷や頸髄症など神経障害が主体であり、学校教育にも含まれています。しかし、頸部の痛みに対するリハビリテーションに対する教育は十分ではありません。これは頸部の局所に触れたり、動かしたりするにはリスク管理も必要であるため、頸部に直接介入するものよりは、神経障害に対する四肢の筋力回復や歩行練習などの方がリスクが少なく受け入れやすいことが理由の1つです。しかし、海外では頸部痛に対してリスク管理も含めた、系統立った評価や治療が確立されつつあり、日本でも教育されるべき分野の1つです。

本書では主に初学者を対象とし、肩関節および頸部の『痛み』に対して、どのようなプロセスで評価・治療を進めていくかを解説しています。本編は肩関節痛と頸部痛の2パートに分かれ、それぞれ基礎、評価、治療、ケーススタディの流れで構成されています。極力筆者を少数にし、流れのなかで矛盾が生じないように筆者間で入念にコミュニケーションを重ね、慎重に内容を作成しました。初学者でもわかりやすい内容に仕上がったと自負しております。当然ながら、本書ですべてが解決できるわけではありませんし、本書の内容と異なる状況も多々あると思います。初学者の方にはそこでなぜ違うのか、背景に潜んでいる原因は何か、考え抜いていただくことでステップアップの踏み台にいただければ本望です。また、経験者の方々にとっても基礎を振り返る一冊になれば幸いです。

最後に、頸部痛の章の編集に惜しめない協力をしていただいた三木貴弘先生、辛抱強く原稿をお待ちいただいた羊土社の皆様、支えていただいたすべての方々々に心より感謝申し上げます。

2018年5月

東北大学病院リハビリテーション部
村木孝行